

◆いのちの感受性

— 人権週間記念講演会から —

今年度も人権週間記念講演会が12月6日(月)文化会館大ホールで行われました。

講演に先立って、市内の小学4年生と中学1年生の二人による人権作文の朗読が行われました。いじめられたり、いやなことを言われたりしたとき、勇気を持って友だちや先生に話を聞いてもらう



ことの大切さや、自分が言われていやだと思ふような言葉を使わないようにしようと思えて、参加者の心に感銘を与えました。

朗読の後、「いのちの感受性」と題して落合恵子さんにお話をいただきました。

【講演の要旨】
もつと軽やかに、そして明るく生きていくために、もう一度人権について考えていきたいと思います。

私たちが豊かな人権意識を身につけるために、まずは、「人種差別」、「性差別」、「年齢差別」、「健常者中心主義」という4

つの鎖から自分を解き放つてあげましょう。差別は、差別される側を傷つけるだけでなく、差別意識の持ち主の心も、差別という牢獄につなぐものです。

10代の方へ。10代で敏感な人権意識を持つている方は、世の中に人権侵害がたくさんあることに気づいて深く傷つくことがあるかもしれません。気づかないより気づいた方がはるかに素敵です。

60代の方へ。私たちは私たちの孫の世代に、こんな息苦しい社会と時代を残していきたくない。そのためには、少々どんなことがあっても暴れてやるぞという思いが強くあります。一緒に暴れませんか。会場には80代から10代までのいろいろな世代の方が参加されています。いろいろなのということはとても大切です。

ある人たち、ある年代だけ、ある人種だけが社会の真ん中にいることは、とても危険なこと。どの人もいろいろそこにいます。これが人権の基本にあたる感覚だと思います。

米国の作家にメインサーソンという素敵な女性がいました。形や向きがどうあれ、世の中でおかしいと思つた時、おかしいですと声をあげられる方、あるいはおかしいところを変えようと踏ん張れる方を、私は素敵だと呼びたいと思います。その彼女が年齢について、次のような言葉を残しています。「私から年齢を奪わないでください。この年齢は、私が働いて働いて、ようやく手にしたものです。」

人権とは誰の足も踏まないこと。同時に、人権とは誰にも自分の足を踏ませないこと。その約束と実行の中に人権という花が咲く。

足を踏まれると痛いということを十分に知っているのに、場面が変わると、今度は違う人の足を踏んでいることはないでしょうか。



落合さんは、自身の生い立ちや4年前に亡くなられた認知症の母親の介護などの話を通して、社会において声が最も小さい子どもや高齢者の声を大切にできた時、この国は本当の意味で豊かになれること。また、病院や介護施設で働く若い人たちの離職率や自死率が高いことを挙げ、本当にこのままでいいのか。お年寄りが、子どもが、生まれてきてよかったといえる時代になりたい。それが自分に課せられた宿題だと、熱く語られました。

最後に、1970年代初頭のヒットソング「You've got a friend」(ここにあなたの友達がいるよ)の曲にのせて落合さん自身が優しい声で詩を訳しながら紹介され

会場の参加者の心を魅了しました。

アンケートの一部を紹介します。

「ことが与えてくれる力」詩や絵本、うた、そして語られることばに、涙しながら聞くことができました。私たちに出来ることは、目の前にある小さなことだけ、それが集まって大きな力になることを信じるしかない。

・小・中学生の人権作文で、子どもたちがどのように感じてどのように子ども社会で生きているのか、それは私たち大人と同じか、或いはもつと繊細な状態であると感じた。
・落合さんの一つ一つのことばが自分の心にしみこみ、日々の生活の中で感じている悔しさなどに対して、勇気が持てました。折れそうな心に灯りがともりました。

・広い視野に立つての講演、時間を忘れて聞きました。自分も相手の立場に立つていつも思っているのだが、なかなか行動が伴わない自分です。世の中が…という前に、自分が今日の話の一つでもスタートできたと思えました。今までにない素晴らしい講演でした。

・心にしみるお話を有難うございました。今後一人で悩まないで前向きに頑張っていこうと思えました。落合さんの話は心に響き涙がでてきました。私の心の中に宝物がひとつ増えました。

●問い合わせ先

人権・向和対策課 ☎72・2111
内線 432